

日本山岳会 ヒマラヤキャンプ登山隊 2023

The Japanese Alpine Club Himalaya Camp 2023

公益社団法人 日本山岳会 創立120周年記念事業

報告書



目次

<u>はじめに</u>	<u>P. 01</u>
<u>隊員名簿</u>	<u>P. 03</u>
<u>登山概要</u>	<u>P. 04</u>
<u>行動日程</u>	<u>P. 06</u>
<u>食糧報告</u>	<u>P. 07</u>
<u>装備報告</u>	<u>P. 09</u>
<u>会計報告</u>	<u>P. 11</u>
<u>保険報告</u>	<u>P. 12</u>
<u>医療報告</u>	<u>P. 13</u>
<u>通信報告</u>	<u>P. 14</u>
<u>渉外報告</u>	<u>P. 14</u>
<u>支援報告</u>	<u>P. 15</u>
<u>輸送報告</u>	<u>P. 16</u>
<u>記録・山行報告</u>	<u>P. 17</u>
<u>メンバーの感想</u>	<u>P. 23</u>

はじめに

■ヒマラヤキャンプを始めた動機

ヒマラヤキャンプは、ヒマラヤを始めとする海外登山の分野で、私が先輩方から受け継いだものや自ら経験してきたことを、できる限り後輩たちに伝えていきたいと思い、2015年に始めたプロジェクトである。振り返れば信州大学山岳会2年のときに休学をし、当時未踏峰であったラトナチュリ（7035m）登山隊に参加させていただく機会を得た。まだ登山経験は浅く未熟であったが、先輩方が受け入れてくださったことで実現した初めての海外登山。そこで先輩たちから多くを学び、かけがえのない経験を積むことができた。このときの経験が今日の礎となっている。

しかし時代は流れ、社会人山岳会や大学山岳部等の既存組織の弱体化が進み、先輩から後輩へ受け継がれていた技術や経験の継承が途絶えるようになってしまったと感じている。このことに危機感を持つようになり、若年者がヒマラヤを始めとした海外登山を経験する場、そして登山経験を積み上げる場としての受け皿が必要であると考え、このプロジェクトを立ち上げることにした。これまでに、2015年秋、2016年秋、2018年春、そして2022年秋の4度にわたってネパール・ヒマラヤに登山隊を送り、下記の通り実績を積み上げてきた。

2015年 ランダック(6220m)東面からの初登攀(3名)、ランシャール(6224m)第二登(2名)
2016年 ロールワリンカン(6664m)全員初登頂(6名)
2018年 パンカールヒマール(6264m)全員初登頂(6名)
2022年 プンギ(6524m)6150m地点まで(3名)

2019年よりプロジェクトをより持続的なものとするため、日本山岳会創立120周年記念事業として受け入れていただいた。育成事業は一過性では効果がなく、継続が求められる。そのためには、個人ではなく組織のプロジェクトでなければならないと考えた。日本山岳会は日本で最も歴史がある山岳会であり公益社団法人でもあることから、その受け皿に最もふさわしいと考え、受け入れのお願いをした次第である。今後も日本山岳会がこれまで積み上げてきた歴史や知的財産を次の世代に継承し、他国山岳団体との連携や各支部各委員会等のネットワークを活用して、組織的に次世代の支援をしていただきたいと考えている。

■ヒマラヤキャンプで実現させたいこと

ヒマラヤキャンプを通して具体的に実現させたいことは、次の3点である。

①ヒマラヤ未踏峰登山のチャンスを作ること

これだけ情報化が進んだ世の中で、情報が無いということは最高の贅沢であると言える。有名な山は登山者が多く、多くの登山記録や写真・映像が存在し、事前にあらゆる情報を得た上で登山を行うこととなる。しかし未踏峰は未知の要素が大きく、現地であらゆる判断をして行動を起こさなければならない。山の難易度に関わらず、この経験は未踏峰でしかできないかけがえのないものである。ヒマラヤキャンプでは未踏峰に挑戦することにこだわりたい。

②海外登山に関心がある若手が集う場を作ること

既存組織が弱体化していることから、海外登山の意欲はあってもパートナーに恵まれない若手が存在する。そんな若手が集う受け皿を作り、さらなる活動のきっかけになるような場を作りたい。

③費用を含め、できるだけ手厚いバックアップができる組織体制を構築すること

私も学生だった頃は、個人負担金を最低限に抑えていただき、経済的な参加ハードルを下げていただいたことでヒマラヤが近づいた。できるだけ手厚くバックアップすることで初期の活動を支援し、継続的な活動につながるよう支援体制を構築したい。

これら3点に力を入れて継続的に取り組み、我々が先輩登山者から受け継いできたものや自ら経験してきたことを、若手にしっかりと継承できるプロジェクトに成長させたいと考えている。

最後になりましたが、この登山を実行するに当たり、多くの方々から多大なるご支援を賜りました。このご支援のおかげで、登山隊に参加したメンバーは、かけがえのない経験と学びを得ることができました。心より御礼申し上げますとともに、2024年以降の活動にも変わらぬご支援とご声援をいただけましたら幸いです。

日本山岳会創立120周年記念事業
ヒマラヤキャンプ プロジェクトリーダー
花谷 泰広

【隊員名簿】



花谷 泰広 (はなたに やすひろ)
会員番号：13552
役割：プロジェクトリーダー



金子 貴裕 (かねこ たかひろ)
会員番号：17081
役割：リーダー・渉外・保険・医療



寺田 紗規 (てらだ さき)
会員番号：17055
役割：支援・会計・食糧



石川 貴大 (いしかわ たかひろ)
会員番号：17074
役割：装備・記録・通信

留守本部

【10月2日～11月4日】

古野 淳 会員番号：12194 (前会長)

【11月5日～11月25日】

花谷 泰広 会員番号：13552 (プロジェクトリーダー)

【留守本部補助】

後藤 希介 会員番号：17068 (ヒマラヤキャンプ2022年隊)

加々見 太地 会員番号：17071 (ヒマラヤキャンプ2022年隊)

安達 正貴 会員番号：A0457 (ヒマラヤキャンプ2022年隊)

現地エージェント

Kangri Trek(P)Ltd.

Naxal, Bhagwati, Bahal, KumariMarg, Kathmandu, Nepal

TEL:00977-1-4414633,4414644 E-mail:kahangritrek@mos.com.np

代表:Pasang K Sherpa

【登山概要】

担当：金子 貴裕

山の名称：シャルプーVI 標高：6,076m
山の名称：サトピーク 標高：6,164m ※計画変更により登山未実施
山域：カンチェンジュンガ
日程：2023年10月2日～11月25日 (55日間)

概要

シャルプーVI及びサトピークは、東ネパール・カンチェンジュンガの西にあるシャルプー山群の未踏峰である。シャルプーVIは山群の一番北、サトピークは一番南に位置している。

カトマンズからはバスとジープを乗り継ぎセカトゥムまで、そこから最後の村カンバチェンまではトレッキングとなる。

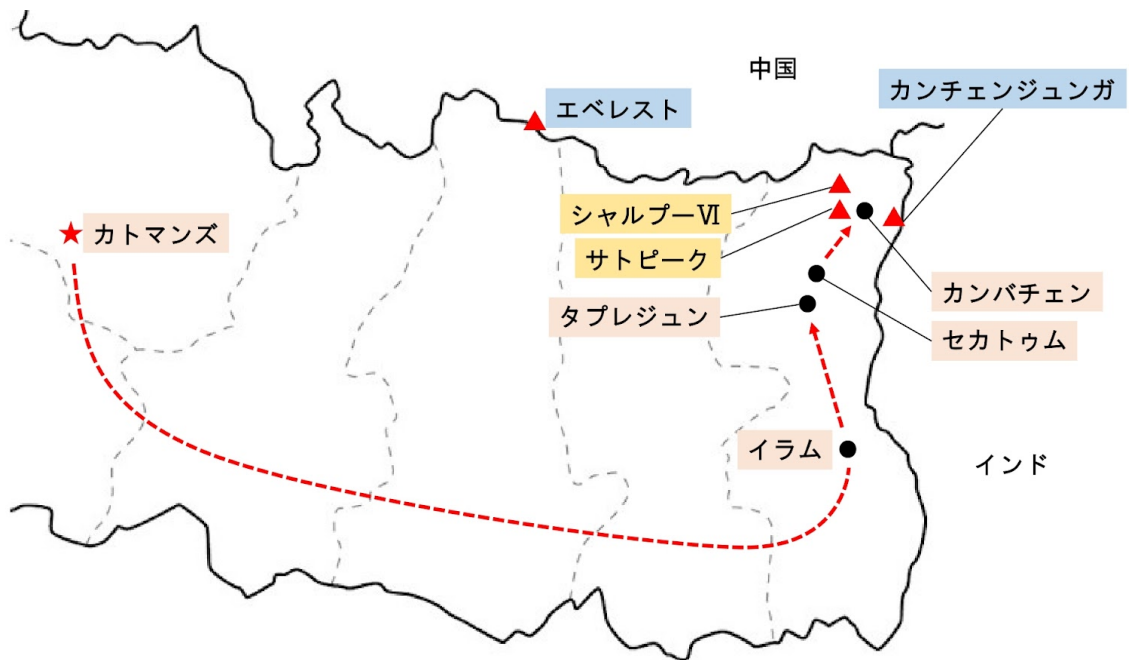
当初、シャルプーVIの南・北東・北側に伸びる氷河からアプローチ予定であったが、偵察の結果、落石・落氷の危険があったり、氷河が繋がっていないことが判明した。そのため、北側に伸びる氷河の更に北側から、標高約6,000mの前衛峰（タナブー）を超えてシャルプーVIの氷河に降り立つルートが登頂の可能性が残された唯一のルートとなった。

サトピークは予備日1日を含めた7日間の計画だったが、BC設営予定地へと向かう道が崩壊しており修復に1日程度掛かることと、シャルプーVI登頂の日程が後ろ倒しになったことによって計画の変更を行い、サトピークの登山を行わずシャルプーVIの登山に一本化することとなった。

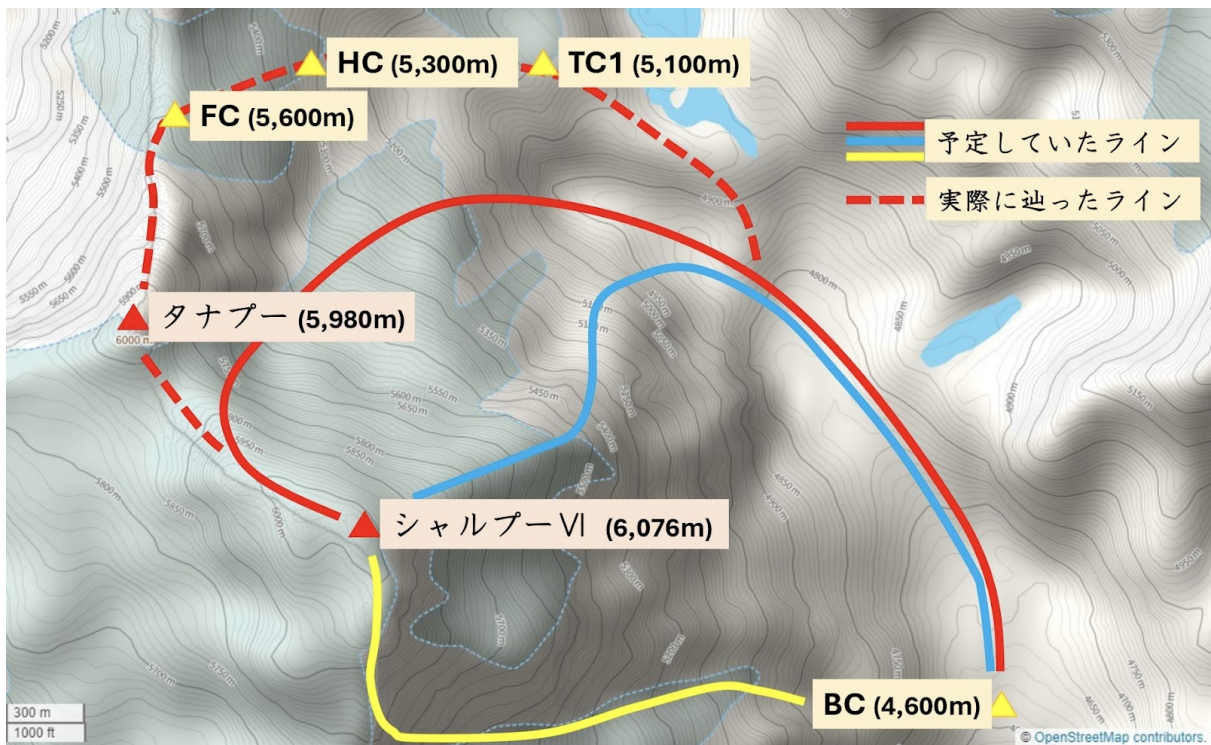


カンバチェンから見たシャルプーVI 東面

キャラバン 概念図



登山 概念図



【行動日程】

担当：金子 貴裕

日数	月日	行程	
1	10/2	手続き・準備	成田発 (12時間遅延 深夜出国)
2	10/3		カトマンズ着 (未明入国) プリーフィング (エージェント)・装備点検
3	10/4		装備点検・パッキング・買い出し
4	10/5		ブジャ・プリーフィング (観光省)・装備点検・パッキング
5	10/6	キャラバン	カトマンズ→イラム (バス移動)
6	10/7		イラム→タブレジュン (バス移動)
7	10/8		タブレジュン→セカトゥム (ジープ移動)
8	10/9		セカトゥム (レスト)
9	10/10		セカトゥム→タンギヤム
10	10/11		タンギヤム→ゲンサ
11	10/12		ゲンサ→カンパチェン
12	10/13		カンパチェン→BC偵察 (4,600m地点)→カンパチェン
13	10/14		カンパチェン→BC設営 (4,600m)
14	10/15	登山期間	BCレスト
15	10/16		BC→上部偵察 (5,100m地点)→BC
16	10/17		BCレスト・ブジャ
17	10/18		BC→TC1荷上げ (5,100m)→BC
18	10/19		BCレスト
19	10/20		BC→TC1荷上げ・設営→HC偵察 (5,300m地点)→TC1
20	10/21		TC1→BC
21	10/22		BC→HC設営 (5,300m)
22	10/23		HC→サミットブッシュ (タナブー基部 5,670mまで)→BC
23	10/24		BC→BC西側氷河偵察 (5,100m地点)→BC
24	10/25		BCレスト
25	10/26		BC→TC1荷上げ
26	10/27		TC1→ルート工作 (氷河下部・タナブー1P目FIX設置)→BC
27	10/28		BCレスト
28	10/29		BCレスト
29	10/30		BC→HC
30	10/31		HC→サミットブッシュ (タナブー山頂付近 5,950mまで)→HC
31	11/1		HC→BC
32	11/2		BCレスト
33	11/3		BCレスト
34	11/4		BCレスト
35	11/5		BCレスト
36	11/6		BC→TC1設営 (寺田)・FC設営 (金子・石川 5,600m)→BC
37	11/7		BCレスト
38	11/8		BCレスト
39	11/9		BCレスト
40	11/10		BC→TC1
41	11/11		TC1→FC
42	11/12		FC→サミットブッシュ (シャルプー 6,000m地点まで)→FC
43	11/13		FC→BC
44	11/14		BC→カンパチェン
45	11/15	バックキャラバン	カンパチェン→ゲンサ
46	11/16		ゲンサ→タンギヤム
47	11/17		タンギヤム→セカトゥム
48	11/18		セカトゥム→カンニヤム (ジープ移動)
49	11/19		カンニヤム→カトマンズ (ハイエース移動)
50	11/20	手続き・片付け	装備片付け・デブリーフィング (エージェント)
51	11/21		装備片付け・デブリーフィング (観光省)
52	11/22		自由時間
53	11/23		自由時間
54	11/24		自由時間・事務手続き (エージェント) カトマンズ発 (深夜出国)
55	11/25		成田着 (午前中帰国)

【食糧報告】

担当：寺田 紗規

日本からの持ち込み

BC滞在中の食事のイメージが湧かず、出来るだけ普段の食事に近いものを食べようと日本から多くの日本食を持参した。



写真左：日本から持ち込んだ食品 (行動食・飲料を除く)

写真右：リフィル (カップラーメン) の販売が無くなったため、真空パックを試みた。
味噌汁・スープ類も同様に封を外し、コンパクトに持ち運びができるようにした。

カトマンズでの買い出し

カトマンズのスーパーでは、マヨネーズやケチャップ、醤油や七味等の日本で使用するような調味料はほとんど揃う。逆に購入出来ないものとしては、ワサビやブルドックソース位であった。行動食のエナジーバーやクッキー類は、沢山の種類が売られていた。



写真左：遠征で使用する生活用品類も全て揃う大型スーパー

写真右：現地で購入した行動食

ネパール産は比較的安価で、欧米などで購入できるお菓子は割高だった。

キャラバン中の食事

宿泊や昼食で立ち寄る宿では、ダルバートやトゥクパ、モモやシェルパシチューなど主に現地のものを中心に食べたほか、スパゲッティやピザ、ケーキがメニューにある宿もあった。



ダルバート (写真左) とスパゲッティ (写真右)

登山中の食事

今回の遠征も、花谷さんと10年来の付き合いがあるサーダー兼コックのダワさんが遠征に同行してくれた。BCでは、キッチンボーイとして若いシェルパのニマ君を加えた2名体制で、美味しい食事を私たちに提供してくれた。

BCでの食事は、ネパール料理だけでなく日本食や洋食もバランスよく出た。そのため、日本から持ち込んだカップラーメンや、ハンバーグや煮魚などのレトルト品を消費するのに苦労した。その他、ゆず胡椒などのチューブ類も持参していたが殆ど使わなかった。また、高山病対策として水分補給を心掛けた。持ち込んだ粉末飲料では、アップルティーやレモンティーなどフルーティーな物や、カフェオレ・抹茶オレなどが人気だった。



BCでの食事例：写真左から、親子丼と味噌汁・スプリングロール・ヤク肉のハンバーグ

標高の高い上部キャンプでは食欲が減退するため、うどんなどの胃の負担が少ない物を朝食に選んだ。夜は疲労回復と翌朝の行動に備えて、アルファ米に牛とじ丼や中華丼のもとなど、フリーズドライ食品を組み合わせで食べた。行動食としては、尾西食品様に提供頂いた携帯おにぎりが活躍した。予めお湯を入れておけば、休憩地点に到着する頃には食べられる状態になっており、量も丁度良く美味しく食べられた。その他、日本から持ち込んだ柔らか



めのグミは人気が高かった。飴は行動中だと呼吸がしづらくかなり余ってしまった。

【装備報告】

担当：石川 貴大

今回は登山スタイルの異なる2座の登頂を目的としていたため、それぞれの山に合った装備を準備した。結果的に、サトピークを削ったため使用した装備は以下となった。BCまでは、ヒマラヤキャンプデポ装備を多めに持参し、現地で選別を行った。

サミットプッシュ1回目

氷河歩行が中心になることを想定した装備。上部もクライミングは伴わないものと考え準備した。

- ・4人用テント ベーシックドーム4
- ・クライミングロープ 60m 2本
- ・スノーバー 4本
- ・アルパインヌンチャク 6セット
- ・終了点セット
- ・アッセンダー
- ・スクリュー 4本
- ・捨てなわ
- ・ツエルト
- ・スコップ
- ・JETボイル
- ・予備ストーブ
- ・ポリタンク 4L、6L
- ・食器
- ・ガス缶 3缶（中古）、1缶（新品）
- ・ソーラーランタン
- ・竹竿
- ・ファーストエイド

FIXによるルート工作とサミットプッシュ2回目

ルート工作及びタナブー基部からのクライミング用にクライミング装備とFIX用のロープを追加した。テントは3人用に切り替えた。

- ・3人用テント エアライズ3
- ・クライミングロープ 60m 4本 ※2本はルート上に事前にFIX
- ・スノーバー 2本
- ・アルパインヌンチャク 5セット
- ・終了点セット
- ・アッセンダー 2個
- ・スクリュー 6本
- ・カム #0.3 #0.4 #0.75
- ・ピトン 6枚
- ・トライカム 3個
- ・捨てなわ
- ・ツエルト
- ・スコップ

- ・プローブ
- ・JETボイル
- ・予備ストーブ
- ・ポリタンク 4L、6L
- ・食器
- ・ガス缶 2缶（中古）、2缶（新品）
- ・ソーラーランタン
- ・竹竿
- ・ファーストエイド

サミットプッシュ3回目

HCのテントを更に上げてFCを設置した。また、サミットプッシュ時に標高を少しずつ上げるためTC1にSLドームを設置した。クライミング装備は雪稜でほとんど使わないため大幅に減らした。また、クライミング要素もFIXによりほぼないため、クライミングロープ1本とスタティックロープ1本で対応した。

- ・3人用テント TC1 : SLドーム FC : エアライズ3
- ・クライミングロープ 60m 1本
- ・FIXロープ 60m 1本
- ・スノーバー 2本
- ・アルパインヌンチャク 2本
- ・終了点セット
- ・スクリュー 1本
- ・トライカム 1個
- ・捨てなわ
- ・ツエルト
- ・スコップ
- ・プローブ
- ・JETボイル
- ・予備ストーブ
- ・ポリタンク 4L、6L
- ・食器
- ・ガス缶 1缶（中古）、2缶（新品）
- ・ソーラーランタン
- ・竹竿
- ・ファーストエイド

【会計報告】

担当：寺田 紗規

収入

- ・ 隊員個人負担金 (30万円×4名)：1,200,000円
- ・ 日本山岳会 23年度予算金：1,000,000円
- ・ 日本山岳会 会員内寄付：1,735,000円 (2023年8月31日時点)
- ・ 会員外個人寄附金：2,000,000円
- ・ 企業支援金：1,500,000円
- ・ 22年度 企業支援繰越金：375,897円

収入合計：7,810,897円 (2023年10月1日時点)

支出

◆国内支出

- ・ 国内準備購入費 (装備・食糧・医療・その他)：194,948円
- ・ 通信費 (インリーチ通信料)：44,777円
- ・ 航空券費 (4人分/1人平均155,900円)：623,600円
- ・ ネパールVISA費：63,750円
- ・ 保険費 (日山共3人分/振込手数料込み)：504,390円

国内支出合計：1,431,465円

◆国外支出

- ・ エージェント費：2,870,467円
(カトマンズ宿泊費・車移動費・登山料・国立公園入域料・BC食糧費・ネパール人スタッフ
日当・ゾッキョ/ゾッキョドライバー代・装備レンタル・ネパール人スタッフ用保険・手数料
料など)
- ・ 装備費：32,603円 (Rs. 30,000)
- ・ 食料費：36,719円 (Rs.33,770)
- ・ 交通費：1,774円 (Rs.1,635)
- ・ 宿泊費：195,439円 (Rs.172,765)
- ・ 食費：124,241円 (Rs.114,207)
- ・ 人件費：138,564円 (Rs.127,500)
- ・ その他：210,308円

国外支出合計：3,610,115円

総支出合計：5,041,580円

【保険報告】

担当：金子 貴裕

今回の遠征も、昨年と同様に日山協山岳共済会の山岳共済会海外山岳保険を使用した。石川は山岳共済会に加入済みのため、花谷・金子・寺田で新たに山岳共済会への加入を行い、金子・寺田・石川の3名で海外山岳保険への加入申し込みを行った。

花谷に関しては、自身の加入している保険と重複するため海外山岳保険への加入は行わなかった。

保険の締結まで約1カ月半掛かったが、昨年を参考に手続きを進め比較的スムーズに保険を締結できた。

三井住友海上火災保険株式会社		
補償内容	保険金額	保険料
死亡	1,000 千円	8,530 円
後遺障害	1,000 千円	3,330 円
治療・救援費用	5,000 千円	155,850 円
賠償責任	100,000 千円	200 円
合計保険料 (1名当たり)		167,910 円
総合計保険料 (3名の合計)		503,730 円

【医療報告】

担当：金子 貴裕

昨年同様、榊原嘉彦先生に医薬品を提供していただいた。薬剤の調達は橋本しをり先生に代わり、今回は三浦裕先生に依頼した。

8月中旬より薬剤調達を進めていたが、全国的に薬剤供給が不安定で入手に時間が掛かり、受け取りが出国の4日前となった。

今回のヒマラヤキャンプでは、昨年の隊をベースに榊原先生に薬剤追加等のリクエストを行ったが、試算が甘かったことが反省点である。



キャラバン及びバックキャラバンでカトマンズ～セカトゥム間の長時間の車移動があり、日本から薬剤を持参したり使用していなかったメンバーがいたことを踏まえると、酔い止めの薬剤の量がギリギリだった。

キャラバン後半のトレッキングでは、金子と寺田が風邪を引き、BC入りする前に抗菌剤が半分程度になってしまった。登山期間中の寺田の歯痛の際も抗菌剤を使用していたため、予備の分を残しほぼ全ての抗菌剤を使用した。メンバー間での感染の可能性も考えると、抗菌剤が足りなくなっていた可能性もある。

前述した歯痛の際は、先に下山した花谷に衛星通信デバイスのインリーチを介して連絡を取り、医療従事者に服薬等のアドバイスをいただいた。

品名		処方	使用
解熱剤・鎮痛剤	ロキソプロフェン 60mg	60 錠	30 錠
総合感冒薬	PL顆粒 1g	60 包	34 包
胃腸薬	レバミピド 100mg	40 錠	17 錠
制吐剤	メトクロプラミド 5mg	30 錠	0 錠
整腸剤	ミヤBM 1g	63 包	12 包
止痢剤	ロペラミド 1mg	60 錠	0 錠
抗菌剤	フラジール 250mg	30 錠	16 錠
抗菌剤	レボフロキサシン 500mg	10 錠	10 錠
抗アレルギー剤	フェキソフェナジン 60mg	40 錠	0 錠
高山病	ダイアモックス 120mg	30 錠	1 錠
高度肺浮腫HAPE	ニフェジピンCR 20mg	10 錠	0 錠
乗り物酔い	トラベルミン	30 錠	22 錠
下剤	センノシド 12mg	30 錠	0 錠
解熱・鎮痛剤	アデフロニック 50mg	20 錠	0 錠
抗生剤入り軟膏	ゲンタシン軟膏 0.1% 10g	1 本	0 本
ステロイド軟膏	リンデロン軟膏 0.12% 5g	2 本	1 本
鎮痛剤	ロキソニンテープ 100mg	49 枚	21 枚

【通信報告】

担当：石川 貴大

無線機・衛星電話

BC以降の基本的な通信は、無線機にて実施した。ダワさんに1台をBCにて常に携帯してもらい、登山中の連絡はダワさんに対して行った。衛星電話に関しては、上部キャンプには上げずダワさんに預けていた。緊急時は、無線でダワさんに連絡をとり衛星電話で対応をお願いする形をとった。また、無線が繋がりにくい可能性も考慮してインリーチのSOS機能はメンバー間で共有した。基本的には無線が通じていたため、連絡における大きなトラブルはなかった。

インリーチ

留守宅本部や国内メンバーとのやりとりはインリーチで行った。また、天気予報もインリーチに情報を送って頂きそれを参考に登山計画を調整した。多少のタイムラグはあるものの、日々最新の情報を得ることができたため、大変役に立った。

【渉外報告】

担当：金子 貴裕

2023年1月より、10月～11月の遠征に向けて現地エージェント、カングリトレックの窓口であるナビン氏とやり取りを重ね計画を進めてきた。

2023年2月、エージェントを介して現地の情報収集をしていたところ、当初の目標として定めていたマナスルサーキットの北東、ガネッシュヒマール近くにある未踏峰、ブンチェンヒマール (6,049m) 及びパシュオ (6,177m) が宗教上の理由で登山ができないということが判明した。遠征半年前にして計画が白紙となってしまう、未踏峰の選定からやり直すことになり大変な思いをした。目標とする山が決定した2022年8月時点でエージェントに確認を行うべきだった。

今回の計画では、目標とする未踏峰が2座ありBCの位置が移動することや、花谷が登山期間中に先に下山しなければならないこともあり、隊の動きが複雑になる事が予想された。そのため、それぞれのスケジュールが一目で分かるような行程表を作成し交渉を進めた。行程の内容や金額等、細かい部分のやり取りは比較的スムーズに行えた。

エージェント	Kangri Trek(P)Ltd. Naxal, Bhagwati, Bahal, KumariMarg, Kathmandu, Nepal TEL:00977-1-4414633,4414644 E-mail:kahangritrek@mos.com.np
代表	Pasang K Sherpa
窓口	Nabin Adhikari

【支援報告】

担当：寺田 紗規

ヒマラヤキャンプ2023では、以下のスポンサー様にご支援頂きました。

以下順不同

スポンサー

株式会社ゴールドウイン (ノースフェイス) 様
日本用品株式会社 (スポルティバジャパン・GM) 様
株式会社インパクトトレーディング 様

サポート

株式会社アライテント 様
株式会社マジックマウンテン 様
株式会社ナンガ 様
尾西食品株式会社 様
味の素株式会社 様
カシオ計算機株式会社 様

医薬品提供

榊原 嘉彦 先生
三浦 裕 先生

天気予報提供

株式会社ヤマテン 猪熊 隆之 様

加えて、多数の個人のご支援も賜りました。
皆さまのお力添えのもと、今回のチャレンジを行えたと実感しております。
重ねてお礼申し上げます。

【輸送報告】

担当：寺田 紗規

日本からカトマンズ

今回、カトマンズへの直行便が出ているネパール航空で、全員が同じ便にて成田から出発した。航空券は、一番安く出ていた「TRIP.COM」にて15～16万円程度で取得した。事前の国際輸送は行わなかった。

ネパール航空 預け・手荷物重量上限

預け荷物：35kg (一つ当たり上限32kg 2個まで可)

手荷物：7kg

国内で共同装備の振り分けを行ったが、昨年と違いメンバー個人のクライミングギアや更新が必要な共同装備、多くの食糧を持ち込んだことでオーバーチャージを支払うことになった。空港でも可能な限り荷物の調整を行ったが、55日分の食糧やギア、衣類等を持ち込むにはネパール航空の35kgはギリギリだと思う。

現地デポ品の更新のタイミングにもよるが、遠征日数が長くなる場合や持ち込むギアが多い場合等、オーバーチャージが予想される際は、予め予算を取り共同装備としてバッグを一つ増やすことも検討しても良いと思う。

カトマンズからBC

カトマンズでは、カングリトレックの倉庫にデポされている共同装備等のチェックを行った。ブルーシート上に装備を広げ、日本から持ち込んだ装備と合わせ、BCまで開けないものとキャラバン中に使用するものを分けて番号を振り、ダッフルバックや樽にパッキングをし直した。カトマンズでの準備期間中は連日雨に降られ、カングリトレックでは去年までテントやシュラフを広げていたスペースが使用できなくなっており、倉庫内や屋上など狭いスペースで作業する事になった。

キャラバン中は、カッツアルやゾッキョに荷物を運んでもらった。濡れ防止のため、日本から持参したスライド式のジップロックや厚めのビニール袋が役に立った。予想より荷物が多くなってしまったため、カッツアルとゾッキョを増やすことになった。



【記録・山行報告】

担当：石川 貴大

10月2日～10月5日 入国～カトマンズ準備

ネパールにあるヒマラヤキャンプ装備と持参した装備を合わせキャラバンの準備をした。観光省にてブリーフィングを実施。今回の遠征では、サーダーのダワさん、キッチンボーイのニマ君が同行することとなる。

10月6日～10月8日 バス・ジープ移動

大型バスで2日間の移動を行う。イラムで1泊し翌日タブレジュンに入る。タブレジュンからジープに乗り換えて、セカトゥムというキャラバンを開始する村を目指す。ジープ移動が始まる日に寺田の体調が悪くなり始め、喉からくる風邪を引いたような状態になる。

10月9日 レスト

前日から体調を崩していた寺田の症状が悪化する。39.5°の熱があり咳も出ている状態。一日レストを行うことにする。BC用の荷物はこの日にゾッキョ部隊が先行して持っていくことになる。

10月10日～10月12日 キャラバン

1日目はタンギャムを目指した。寺田は、相変わらず熱と咳があったが、歩いたら良くなると言って前進することになった。金子は朝に体の違和感を訴えていたのだが、昼食をとった際に38°の熱があることが発覚した。花谷・石川は体調に問題はなかった。2日目、2人の体調がやや回復する。抗生剤が効き始めた様子だった。この日はグンサまで進む。3日目、寺田の体調は大分良くなり元気を取り戻す。金子は朝から食欲が無かったが、キャラバンは問題ないということで出発したものの、20分ほどで足取りが重くなる。確認すると、やはり調子が悪いとのことで、金子はグンサに引き返すことになる。この時、ゾッキョが荷物を運び出すタイミングだったため、花谷もグンサまで同行して説明を行い、荷物の再振り分けを行った。石川・寺田が先行して進み、花谷は後ほど合流となった。3人はカンバチェンに到着し、標高差100mほどの順応運動を行った。

10月13日～10月14日 BC偵察・設営

カンバチェンで迎えた朝、初めて今回の目的であるシャルプーVIを見ることができた。この日はベースキャンプの偵察に向かう。4,600m地点に適地を見つけカンバチェンへ下山。翌日、荷物を整えBC入りをした。

10月15日 レスト

金子がカンバチェンからBCまであがり、3日ぶりにメンバーと会う。現地の食事が喉を通らず大変だったと話をしていた。この日は順応のみのため、少し話をして金子はカンバチェンへ戻った。

10月16日～21日 ルート偵察・TC1及びHCの設営

16日はBCから先の偵察を行った。5,200m地点まで登る途中、5,100m地点に幕営適地を見つける。金子が4日ぶりに本隊と合流した。17日はレストとした。この日にダワさんにブジャを行ってもらった。18日、偵察で見つけた5,100mの幕営適地に、氷河上で使用する装備の荷揚げを行った。19日はレストとし、装備の確認を行い翌日からのHC偵察に備えた。

20日、5,100mの幕営適地にTC1を設置した。その後、HCへの偵察を行う。偵察にはダブルブーツを使用した。履き慣れないメンバーもあり時間を要してしまった。5,300m地点にHC適地を見つけ、アイゼンやロープなどをデポ。TC1へ戻り1泊する。21日は、レスト日も兼ねていたため、早々にTC1からBCへ下山する。



10月22日～23日 サミットプッシュ1回目

レストが半日となってしまうが、24日・25日の強風予報を考慮して1回目のサミットプッシュを行う。22日にTC1のデポ品とテントを回収しHCまで上がる。HCは氷河に入る直前にあり水もとることができる。早めに夕食を済ませ19時に就寝。

翌朝3時に起床。石川・寺田はあまり睡眠を取ることができなかった。後に分かったのだが、寺田は朝食をほとんど口にすることができず、準備の際に嘔吐してしまっていたとのこと。準備を済ませ、5時にテントを出る。金子・石川でロープを繋ぎ、先行して氷河に取り付く。後ろは寺田・花谷のペアとなる。金子が傾斜のある雪壁を直登気味に登る。その脇に緩い傾斜部があり、そちらを通るよう花谷から指示が出る。その後はクレバスを縫うように標高を上げていく。途中、先頭を石川に交代し、5,600m付近のコルに上がる。寺田・花谷ペアには、ピンクテープを設置しながら追いかけてもらった。金子・石川はコルからタナプー（シャルプーⅥの前衛峰）の基部に向かった。基部に到着し雪壁の状態を確認すると、支持力のない雪がガラガラした岩に乗っかっているような状況で、プロテクションが取りづらいように思えた。岩はところどころ出ていたが、BCから岩の装備を持ってきたいなかったため、先へ進むには装備不足と判断し引き返すことになった。

4人で話し合いを行い、別ルートの偵察をしながらHCに戻ることにする。この時、寺田の調子が悪くなる。高所への順応が上手くいっていなかったと話す。花谷と先にHCまで降りてもらい、別ルートの偵察は金子・石川で行った。別ルートの見当を付け、金子・石川もHCへ戻る。HCでは、高山病の症状が出ている寺田がテントで休養を取っていた。翌24日から天気が崩れる予報であったため、同日の下山を決定する。また、今回とは別の方角から登ることを視野に入れていたため、全装備を持って下山することとなった。

下山開始前、金子が吐き気と頭痛を訴えた。花谷と石川に共同装備や重量物を振り分け下山となった。下山時、寺田・金子の調子は十分悪く、途中迎えに来てくれたダワさんとニマ君に荷物を持って貰ったが、それでも足元がおぼつかない様子だった。2人は下山後テントで休養を取り、花谷・石川で装備の片付けを行った。

10月24日～10月27日 新ルート偵察・ルート工作

24日、BCの西側にある丘に上がり、シャルプーⅥの南側のコルに抜けられないか偵察を行った。しかし、上部氷河が複雑に入り組んでいたことと、コルの手前で氷河が途切れていたため、こちらのルートからの登攀は厳しいという判断となった。結果、全装備を下ろして

しまっていたが、再度1回目のサミットブッシュのラインを辿り、基部から雪壁の登攀を試みることにした。

25日、石川が装備の選別と竹竿の準備を行い、午後からパッキングを行った。26日は花谷と行動をする最終日となる。隊としては、この日から2日間は荷上げとルート工作になる。1日目、TC1の荷揚げまで花谷に同行してもらった。この日はHCまで上がる予定だったが、荷上げでペースが上がらずTC1までとなった。

翌朝2時半に起床。金子・寺田はあまり眠れなかった様子。この日は、TC1の荷物を撤収してHCまで荷上げを行い、その後ルート工作となる。夜明けにHCに到着しテントを設置。ルート工作の準備を行い、タナプー基部へ向かう。基部に到着し、石川がリードをして60mロープをいっぱい伸ばしFIXロープを張る。雪の状態も以前より良くなっており、クライミング的な難しさの少ない登り易い雪壁だった。しかし、プロテクションが取りにくく、20mおきに1つ取れるかどうかだった。露出している岩は、ガレガレの岩が重なっているだけで安心できるクラックではなく、できるだけ大きな岩の隙間にカムやトライカムを設置して支点とした。FIXを張り終えると、帰りがけにもう1本のロープを氷河上の傾斜が強いところに設置し、そのままBCへ下山した。

10月28日～10月29日 レスト

28日、金子と石川が話をしている際に、ダワさんに2座目に予定しているサトピークの行程を確認すると、バックキャラバンにもう1日必要になることが分かった。そうになると、サトピークに十分な時間が取れなくなり、どちらも登れない可能性が高いと考えた。金子・石川は1座に絞る方向で意見がまとまり、テントで休養していた寺田にも伝えた。サトピークの登山を中止し、シャルプーⅥに一本化することにした。29日はサトピーク用の食糧などをバラして整理を行った。

10月30日～11月1日 サミットブッシュ2回目

2回目のサミットブッシュ。ここから花谷の同行はなくなり3人での登山となる。30日、HCへ向けて上がっていく。この日は金子が息がしづらいと訴え、歩みがゆっくりとなる。HCでの夕食もお腹が苦しいと話し、ほとんど喉を通らない状態だった。翌日は1時起床予定のため早めに就寝した。また、この日は3時間ほど降雪があった。

翌朝、1時に起床し3時に出発した。まだ金子のお腹が不調だったため、金子を真ん中にし寺田・金子・石川の順でロープを繋ぎ氷河を進む。途中、寺田と石川が先頭を交代する。金子の足取りが重いため、確認すると頭が痛いとのこと。氷河上をややゆっくり進み様子を見る。タナプーの基部まで来ると空が明るくなってきた。金子の調子も少し良くなり始める。前回張ったFIXにセルフを取りながら石川が先頭で登る。FIXの終了点の手前に十分なスペースが取れたため、金子・寺田をビレイし上がってきてもらった。2P目は寺田がリードをした。25mほど登りフルートの手前でピッチを切る。3P目は金子がフルート上をリードする。4P目以降は、下から見ていたよりも傾斜が無かったため、コンデに切り替える。石川が先頭となり、ラッセルしながらタナプーの肩直下60m地点まで進む。ここで傾斜が増してきたため、スタカットに切り替える。金子に先頭を行ってもらう。石川が支点回収と合わせて、さらに深く雪を掘り氷の存在を確認する。金子が肩の上まで抜け3人が合流する。しかし、そこはタナプー山頂まで数百メートルのリッジを残した場所だった。この時点で予定時間を過ぎていたことと、下降方法の当てが無い状態で登ってしまったことから、急ぎ撤退と下降方法の検討を始める。念のため、リッジの裏が見える場所まで行き、シャルプーⅥ方面の写真を撮った。石川が雪を掘り下げ、下降点となる氷にアバラコフを作成し懸垂下降を開始する。2回目の懸垂下降は、登りで石川が掘り出した氷を使用した。3回目の下降地点からは氷が出てこなかったため、スノーバー2本での懸垂下降となった。雪が硬くなかったため、石川がスノーバーを押さえ2人に降りてもらった。石川はスノーバーを回収しクラ

イムダウンで下降、これを2回繰り返した。その後、FIXの上端までクライムダウンし、懸垂下降をして基部に戻った。この時、技術的にも体力的にも厳しいのではという思いがあり、FIXロープは全て回収しながら下山をしていった。夜になってから氷河の基部に着き、2人にカメラを向けると悔しさを隠しきれない言葉が出た。実質的に敗退を意味する内容だった。寺田は疲労が溜まっていた為、テントに戻ると水も飲めずに寝込んでしまった。金子・石川で水を作り、食事をして就寝。11月1日、テントに陽が当たる頃に起床。すると、昨日とは一変して2人の口からまだ行ける可能性はあるかもしれないという言葉が出た。再チャレンジすることを3人で確認した。不要な装備は持ち帰り、次回のサミットプッシュのために大幅な軽量化を図った。しかし、ここで寺田が歯痛を訴え、BCへ下山した後も痛みは続いた。歯痛は高所で改善しないという話もあったため、不穏な空気が流れた。



11月2日～11月5日 レスト

2日、寺田の歯痛は収まらず顔が腫れていた。昨晩は痛みで殆ど眠れないくらいの痛みが出ていた。抗菌剤とロキソニンの服用を開始する。3日になり、朝食に現れない寺田を心配し様子を確認しに行く。顔の腫れは変わらないが、体は元気で問題ないとのこと。サミット

プッシュに関しては我慢してでも行きたいと訴える。アドバイスを求めるため、インリーチで花谷さんや志賀先生、榊原先生に連絡をする。やはり、高所に上がると基本的に痛みは改善しないという意見が出る。痛みの度合いにもよるが慎重な判断をするようメッセージが届いた。次回はこれまでで最も負荷の高い登山になるため、無理はできないのではという意見も出て、結論は持ち越しになった。4日、寺田の歯痛がやや治まってくるが、高所では悪化するリスクもありメンバー間での意見がまとまらない状態が続いた。そんな中、新しい天気予報の情報が来る。次回、サミットプッシュを予定していた日が強風予報に変わってきたため、登頂予定日を12日に変更し、寺田の回復を待つことになった。5日、石川が上部キャンプの装備をまとめ、荷上げの最終準備を行う。寺田の歯痛は改善傾向となり、鼻腔内の炎症が影響していたのではという結論となった。

11月6日 TC1の再設置とFC設営

この日はTC1の再設置とFCの設営を行った。調子が戻ったばかりの寺田にTC1の再設置を頼み、金子・石川でHCの回収とFCの設営を行った。FCを5,600m地点に設置した。強風予報を考慮しブロックを積んで風除けとした。

11月7日～11月9日 レスト

7日、久しぶりにのんびりとした1日を過ごした。久々に頭を洗ったが季節が進んで前回よりも寒く感じた。8日、サミットプッシュが日程最終日までかかるため、バックキャラバンの準備を少しずつ始めた。9日、最後のレスト日をのんびりと過ごした。

11月10日～11月14日 サミットプッシュ3回目・BC撤収

10日、3人とも体調は良かった。TC1まで問題無く上がり1泊する。今回、TC1ではSLドームという軽量テントを使用した。軽量で薄い素材のテントだが、快適に過ごすことができた。11日、FCまで上がる。寺田は、高度の影響が出ていると言い、少し疲労している様子だったため、水作りも兼ねてテントで休んでもらった。金子・石川で荷物とトイレのスペースを掘り出した。石川が寝始めに頭痛が出たが痛み止めで対処した。

サミットプッシュ当日、1時に起床。寺田は殆ど眠れなかったとのこと。3時出発を予定していたが、準備に時間が掛かり3時45分に出発となる。夜間の行動になったが風も弱く冷え込みもそれほど感じなかった。前回、雪壁は問題無く登れる内容だということが分かったため、ランニングを取りながらコンテで進む。石川が先頭で2ピッチ分進み、前回見つけておいた風裏の岩穴で休憩を取る。そこから金子が先頭でフルートに入る。ここもコンテで進み、3分の1程度進んだところで石川と先頭を交代する。肩の手前60m付近で再び金子に先頭を交代する。肩から先のリッジは300m程度続いていた。リッジ上は全て石川がリードし、支点作成を行った。リッジ自体は歩ける幅があったが、雪が柔らかく支点を作るには不向きであった。そのため、支点となる硬い層を掘り出すのに体力を要した。リッジ上はコンテとスタカットを交えながら進んでいった。途中、2番手を進んでいた寺田が1.5mほどリッジ北面へ滑落した。側面をトラバース中にアックスで柔らかい雪を切ったのが原因だった。幸い石川のビレイで止まった。危ない瞬間だった。タナブー山頂手前の岩場に着き小休止を取る。その後、タナブー山頂をトラバースしシャルブーVIとのコルを目指す。この時点で時間的に厳しい状況であったため、疲労が始めていた寺田の荷物を金子・石川に振り分け空荷になってもらった。時間が許す限り山頂を目指して進むということで意見がまとまる。コルまではガレ場と緩い尾根を下った。コルから先は、金子・石川が交代でモナカ雪をラッセルしながら進んだ。氷河を登り返し、もう少しで上部の氷河に乗れるところまで来たが、その氷河は繋がっていなかった。唯一可能性がある道として、完全に埋まったクレバスの先にある雪庇を崩せば、その先に進むことができる可能性があったため、石川がトライしてみることになる。しかし、ここまでのペースや既にタイムリミットになっていたことなど、様々

なことを考慮してこの先に進むべきではないと考え、雪庇の突破を諦めて降りることにした。他に選択できる道は無く、3人で話し合い撤退の判断を下す。

同ルートに戻りながら、タナプーの山頂を踏むことにした。日が沈みかけた頃、標高5,980mタナプーの山頂に立った。ここが3人で踏んだ初めてのヒマラヤのピークになった。少しばかり余韻に浸り下降に入る。リッジは行きと同様、石川が先頭で支点を作りながら進んだ。肩からの下降は、前回同様掘り出した氷を支点として2ピッチ懸垂下降。その後の懸垂下降は石川がスノーバーの支点を押さえて待機し、2人に先に降りてもらった。石川はスノーバーを回収しクライムダウン。5回目の下降は時間短縮のため、2人をローダウンで降ろし、石川はクライムダウン。最後はFIXの支点で懸垂下降し、タナプーの基部に降り立った。寺田の反応が薄く低体温の可能性も考えられたため、足早にFCへと向かう。21時45分、18時間のサミットプッシュが終わった。13日、FCを撤収しTC1へ向かう。TC1でダワさんと合流し、荷物を少し持ってもらう。BC撤収の準備をして就寝。14日、タナプーが既に登られた山だということが分かる。BCを撤収してカンバチェンへと下る。



11月15日～11月17日 バックキャラバン

バックキャラバンは行きと同じ村に宿泊した。

11月18日～11月19日 ジープ・バス

行きで3日間かかった行程を短縮し、2日間でカトマンズまで戻った。

11月20日～11月24日 カトマンズ

装備の片付けやデブリーフィングを行い、帰国の準備を行った。24日深夜の便にてネパールを離れた。

11月25日 帰国

無事帰国しそれぞれの帰路に着いた。

【メンバーの感想】

花谷 泰広 役割：プロジェクトリーダー

2020年の春もヒマラヤに行く。そのつもりでいろいろ準備を進めていたのに、まさかのパンデミックで先行きすらも見えない状況になってしまった。2022年秋になってようやくコロナが少し落ち着いてきて、ヒマラヤキャンプとしてヒマラヤでの登山活動を再開することができた。しかし私自身は国内での状況がコロナ前と大きく変わってしまった。特に2022年は新事業の立ち上げが続いて大変忙しく、どうしても現地に同行することができない状況だった。結果として初めてメンバーのみでのヒマラヤへの挑戦となった。目標ピークの初登頂には至らなかったものの、参加した3人は様々な経験をして大きく成長して帰ってきた。ヒマラヤキャンプ再開の一步を踏み出してくれたことを本当に感謝している。

2023年はなんとか同行できる状況となったが、ヒマラヤ登山を行うのは2019年の春以来となってしまった。3年半のブランク。その間、まともにトレーニングもできていなかった。平静を装っていたが、フィジカル的には相当な不安の中での出発となった。しかし問題は、フィジカルではなくメンタルだった。現地に着いてからも日本のことが気になってしまって、ヒマラヤを目の前にして全く楽しめない自分がいた。こんな気持ちで準備をするのも初めてだった。やはりヒマラヤに来ること自体に無理があったのか。

全く集中できない状況でキャラバンが始まった。陸路を3日かけて移動。まだ電波は通じるから、いろいろと情報が入ってくる。電源を切れればいいと言われるかもしれないが、事実として通信ができる場所にいる以上、気になって仕方がない。しかしカトマンズを離れて4日目。ついに電波が途切れた。すると不思議なことに、突然山に対して完全に意識が入るようになった。そして山と向き合う気持ちが一気に高まった。この気持ちは結局登山隊から離れて電波が回復するまで保たれていた。電波が回復するポイントは本当に憂鬱だったが、出発前と違ってすべてを前向きに捉えられるようになっていた。

やはりヒマラヤから遠ざかっていた3年半が、私にとっては異常な時間だったのかもしれない。常に入ってくる情報。そしてその量が増え、多様になった。コロナ前もそれなりの情報に埋もれていたが、ヒマラヤに来ることで強制的に遮断されていて、その間にデトックスできていたのかもしれない。3年半もの間、情報にさらされ続けていて、いつしかその情報量が相当なストレスになっていたのだろう。今回の個人的なヒマラヤでの最大の成果は、この情報デトックスがもたらしたその後の生活の充実かもしれない。もちろん最後まで一緒にいられれば、もっと効果があったに違いない。登山としても中途半端なところで帰ることもなく、一緒に過ごせて楽しかったと思う。しかし今の状況では1ヶ月が精一杯。その中でできることを最大限やろうと思ってきたので悔いはない。

登山隊を途中で離脱した私は、今回の登山に関して書けることはほとんどない。今回の私の役割は、メンバーたちとベースキャンプに入り、できる限り一緒に登って伝えられることを伝えるだけだった。しかし氷河の上を歩けたのはたった1日。一緒に登山らしいことができた時間はほんの少しだった。登山に費やしたほとんどの時間を初ヒマラヤの3人で過ごし、未踏のシャルプーⅥと向き合い、少しづつヴェールを剥がしながら前に進んだが、あと一歩及ばなかった。結果としてシャルプーⅥの山頂には立てなかったが、未踏峰と向き合った時間はかけがえのない時間だったに違いない。悔しかっただろうが、やりきった思いも大きかった気がする。そういう登山はなかなか経験できない。それが経験できて本当に良かったと思う。3人がこれからもヒマラヤ登山を続けるかどうかは問題ではない。今回の経験は、きっと今後のクライミングや人生に活かされる経験だったに違いない。

最後にヒマラヤキャンプのプロジェクトリーダーとして皆さまに御礼申し上げます。

このプロジェクトは多くのご支援によって成り立っています。特にこれだけ為替が不利な中での海外登山は、私が盛んに登っていた10年前などと比べてはるかにハードルが高くなっています。2025年の日本山岳会創立120周年に向けて、2024年は4名が、2025年は5名がメンバーあるいはメンバー候補として決まっています。継続的な活動こそが育成につながります。どうか引き続きご支援をいただきたく、お願い申し上げます。

金子 貴裕 役割：リーダー・渉外・保険・医療

私のヒマラヤキャンプでの本格的な活動は、2020年のメンバー選考からスタートした。本格的にアルパインクライミングを始めたのもこの頃だった。当時、経験不足で遠征を先送りとし、今回のヒマラヤ遠征に至るまで実に3年半が経過した。この長い時間は私にとって決して無駄なものではなく、国内で経験を積み、海外の山へ踏み出すための貴重な充電期間だったように思う。長い間、パートナーとしてロープを繋いでくれた寺田には本当に感謝している。

コロナ渦が終息しつつあった2022年、目標とする未踏峰が決まり計画が形になり始めると、遠征の準備に追われ出国まであっという間だった。以前に参加した公募隊の海外登山では、高所への耐性こそあったものの、食事や生活面等の環境の変化に弱く順応するのに時間がかかっていた。ネパールでも同じように環境への順応が課題となった。カトマンズを離れキャラバンがスタートすると、生活の変化にストレスを感じつつも少しずつ体が慣れ始めていた。そんな矢先に風邪を引き、途中の街で1人停滞することとなった。熱が下がらず、停電した真っ暗な部屋で天井だけを見つめる時間が続き「自分だけが登れないんじゃないか」「ここで旅が終わってしまうかもしれない」と次第にマイナス思考になっていき、心はどん底に落ちていった。この苦しい状況でも「ここで終わる訳にはいかない」と気持ちを切り替えられたのは、支えてくれている人達や今まで地道に積み重ねてきた時間があったからだと思う。

長い停滞から抜け出し、最後に訪れた街で初めてシャルプーVIの姿を目の当たりにした。その時はあまり現実味が無かったが、進むに連れて徐々に現れる山の荒々しい一面に興奮したのを覚えている。最後のサミットプッシュでシャルプーVIの氷河を登っている時、視界に広がる山々の美しさやラッセルの苦しさよりも、登頂への焦りの方が勝っていた。「今のペースでは登頂できない」「この先の氷河が繋がっていない可能性もある」そう感じながらも、マイナスな感情を掻き消すように必死で歩を進めた。タイムリミットが近づく中、その踏み出す一歩一歩が未踏だと思うと、何とも言い表すことのできない気持ちになった。

最高到達点となった約6,000m地点に到着すると、山頂へ続いていると思われた氷河は大きなクレバスに分断されていた。この時点で、心のどこかで登頂が叶わないことは分かっていたような気がするが、自分の中で認めたくなかったのだと思う。2020年の選考からここに至るまでのプロセスがあった分、登頂への道を絶たれ敗退を決めた時は悔し涙が溢れた。その後、復路でタナブーの山頂に立った。夕日に照らされた稜線や、雲海に浮かぶマカルーの姿が今でも目に焼き付いている。この3人のメンバーでヒマラヤの山頂を踏めて本当に良かったと心から思えた瞬間だった。

後にタナブーは未踏峰ではないことが判明したが、事前情報無しで登っていたからこそ、それと何ら変わらないプロセスを踏む事ができたのだと思う。この経験とそれに至るタクティクスは、今回の登山で得た大きな収穫の一つだと思う。約1カ月に及ぶ登山期間の中で、シャルプーVIの氷河に触れたのは最後のサミットプッシュ時たった1回のみであった。私達は、シャルプーVIに登っているようで実際はタナブーと対峙していたのかもしれない。また、山だけでなく自分自身と向き合わなければならぬ事も多くあり、自分の弱さを痛感した登山だったように思う。この遠征で得た貴重な経験を、次なる挑戦へのステップとして今後の活動に活かしていきたい。

最後に、遠征のチャンスを与えて下さった花谷さん、23年隊をサポートをして下さったスポンサーの皆様、応援して下さい皆様、そして一緒に登山をしてくれた2人のメンバーに感謝したいと思います。

20代前半に家族で登った富士登山がきっかけとなり、単独で登山を始めた。20代後半から本格的に山と関わって生きていきたいと思うようになり、単独登山から、パートナーを見つけフリークライミングや初級のアλπインクライミングをやり始めた頃に、ヒマラヤキャンプという活動を知った。

2018年に新たな募集をしている事を知り、応募。2018年冬には、ヒマラヤキャンプのメンバーと初めての顔合わせのために黒戸尾根を登っていた。5年前のことだ。

応募したきっかけは、ヒマラヤ末踏峰登山というよりも、デカい山に同世代のメンバーと自分たちで考えて登る事に関心があったからだと思う。あの頃は、山仲間も少なく、周りは大人ばかりに感じていた。

2020年、ヒマラヤキャンプ2020の遠征と重なるタイミングで、パートナーと違う山に登山に行こうと思っていたため、メンバーから外れた。その後、コロナ禍になり、世界が止まった。

そんな中、諦めずに活動意欲を持ち続けていた金子君とふたり、手探りで、ヒマラヤの山探しから始め、少ない時間の中、なるべく毎月ロープを繋ぐようにした。

どちらかと言うと、無口な金子君の敬語がなくなってきた頃、登る山が決定した。実はこの山は今回、登りに行った山とは違う。元々登ろうとしていた山は、宗教や国境の問題で、受け入れてくれなかった。

その後、口説いてた石川君がメンバーになってくれて、3人でのヒマラヤキャンプ2023年隊が動き出した。新たに山を選び直し、シャルプーⅥとサトピークに登山許可が下りた。

『旅としては楽しく、登山としては楽しくなかった』

ネパールでの登山を終え、自分自身の不甲斐ない結果に、今後自分は、どう山と向き合っていくべきなのか？何も出来なかった初めてのヒマラヤ登山に、数週間、自問自答を繰り返していた。

次、ヒマラヤに帰ってくるまで、日本でやれる事は沢山ある事に気付けたし、その場が楽しいだけのクライミングに逃げかけていた、努力をしていない自分に気付けたし、自分の足で行って見なければ、そこに登れる場所があるのか、わからないという経験は、山への取り組み方として新しい感覚だったし、カッコいい先輩クライマー達のヘッデンの灯りを見た時のあの興奮は忘れない瞬間だし、ジャヌーの要塞感には驚いたし、でもやはりカッコ良かったし、タナブーを誰も登っていないと思ってリードした2ピッチ目は最高に楽しかったし、今後やりたい登山も明確になった気もしている。全てにおいて強くならなければ話にならないけど、どう登りたいのか、そのためには何が必要で、何が足りないのかを普段から意識的に考え行動しなければ、きっとまた楽しいと思える登山は出来ないと思う。

今はこのタイミングで行けて、本当に良かったと思っている。こう書き出して見ると、とても楽しい2ヶ月、いや...1年だった。

2ヶ月間、共に生活をし、同じ山のことを思っていたメンバー、また、カッコいい背中を見せてくれたプロジェクトリーダーの花谷さん。ヒマラヤキャンプの仲間たち、日本山岳会及び、ご支援いただいた企業さま、専門家の皆さま、個人寄付をいただいた皆さま、応援してくれた山仲間のみんな、いつも支えてくれる親友達にこの場を借りて深く御礼申し上げます。最後に、ヒマラヤキャンプの新メンバーとして、北海道から毎月のミーティングに顔を出し、やる気に満ち溢れていた、可愛い弟の様な存在だった亮磨へ。9月に北海道の山で遭難したことが悔しく、残念です。心からご冥福をお祈りします。

次の目標に向けて、がんばります。

私は2019年11月にヒマラヤキャンプに入り、2020年隊として活動を始めた。それも東の間コロナ禍に入ってしまった。予約したフライトはキャンセルになり出国目前にして、ヒマラヤ遠征は中止になった。それから3年半がたち、今回2023年隊としてようやくヒマラヤの地を踏むことができた。

2023隊として未踏峰に挑戦して最も感じたことは、日本での登山がやはり大事なことだということだ。未踏峰へ登るためには行きたいという気持ちだけでなく、行けるという気持ちをどこまで高めることができるかが鍵になると思う。日本でできたことが、思うようにいなくなるのが高所。そうだとしたら日本でできていないことはやはり高所でもできない。色々な経験を積んで技術、体力を高めて、どれだけ行けるという気持ちになってから挑めるかが全てだと思う。私はヒマラヤの山と向き合いながら、ここは日本でやって来たことを鏡のように映す場所なのかもしれないと感じていた。日本でやっていることをより確実に、より慎重に粛々とこなして繋げていく場所だと実感した。

その思いは、日本にいる時から感じていたことでもあった。だから出発までの3年半は本当にたくさん歩いた。隊の一員として映像を撮りたいというのもあったが、初めてのヒマラヤでちゃんと山と向き合いたいと思ったから、体力を底上げして挑んだ。そのおかげか体力的な部分ではあまり苦労せずに登ることができた。今回は動画用カメラと写真用カメラの2台を持った状態での登山になったが十分とまではいかないが問題なく動くことができたと思う。それは、自分の中で大きな自信になった。6,000mで自分がどんな撮影をする事ができるのか、その一端を知ることができた。それは、今後の活動にも生かしていく事が出来ると思う。

今回挑んだシャルプーVI峰は、いい意味でいろんな形の登山を提供してくれたと思っている。ルートを選択に悩まされ一度撤収したキャンプを再設置したり、キャンプの標高を変えて再トライしたり、登っては考えて登っては考えての登山をすることができた。その時間は山の事だけを考えて過ごす貴重な時間になった。結果として残念ながら山頂を踏むことはできなかった。行けなかった要因としては認識が甘かった部分やタクティクスなど色々な要因がある。ただ、帰るタイミングを見誤らずに済んだことは良かったと思っている。

ヒマラヤキャンプを通して、これからの登山において、次に何が必要なのか知る事ができた。また、初めてヒマラヤに触れて、今まで以上に山の魅力を感じることができた。この知らなかった世界に触れて、もっとたくさんの山々を見てみたい、ヒマラヤにまた訪れたいと感じた。山を見て「すごい」「綺麗」と純粋な気持ちが湧き上がったのは久しぶりだったように思う。仕事でも山に関わるようになり、山にすることが当たり前になって忘れていた気持ちを再度呼び起こしてくれたのが今回のヒマラヤ遠征だったと思う。見たことのない景色、登ったことのない山々、これからの自身の登山がまた一つ広がったようにも感じる。

今回の経験をこれで終わらせず次に繋げることを今はじっくり考えている。ヒマラヤを目指していく過程の中で私の登山はどんどん変化していった。ヒマラヤキャンプに入った頃はクライミング中心の登山がほとんどだったが、そこからアルパインクライミングや縦走に幅を広げた。また仕事においては歩荷や撮影に関わる機会が増えた。トレイルランニングのレースでランニングカメラマンをするようにもなった。次第に、写真や動画を自分で撮るようになった。そして、今回のヒマラヤ登山があった。これからどんな登山をしていくのか私自身の中でまだはっきりしていない部分もある。でも今回のヒマラヤ登山が新しい可能性を見出してくれたことは間違いないと思う。